
狂犬病予防業務日誌

赤いからす

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

狂犬病予防業務日誌

【Nコード】

N3910C

【作者名】

赤いからす

【あらすじ】

とある地域保健所で臨時職員として働いておれは、クリスマス・イブの日、事務所で一人残業していた。すると、冴えない感じの老人が犬を処分したいと訪ねてきた…おれの長い夜がはじまるうとしていた。

プロローグ（前書き）

地域保健所で処分される犬や猫の実態をまじえた作品になっています。

プロローグ

ミンナ…ミンナが不機嫌だ。
食べ物をくれない。物欲しそうな顔をして無視される。

足場が不安定なのに文句ひとつ言わずに仕事していた屈強な男たちから笑顔と鋭気が消えた。ミンナはベッドに横になって背を向け、死んだように眠っている。

存在を忘れ去られているのだろうか？

少し前までぼくの頭を代わる代わる撫でにきて腹一杯になるまで食べさせてくれたのに…。

理由として考えられるのはじゃれたついでや手渡しで食べ物を買ったときに謝って歯を立ててしまうことくらいだ。

「コイツ、海に放り投げてやろうか！」

と、怖い顔をして怒る人もいるけれど尻尾を振ってあどけなく振舞うと周りの人は庇ってくれた。

反省を踏まえて不快を与えない程度に軽く咬んで怒る人と怒らない人を見極めた。触れ合った人たちは高い確率で元気がなくなり部屋に閉じこもってしまう。

からかわれているのか、本気なのか、どちらにしても仲間はずれにされるのは面白くない。とても不愉快だ。

海に浮かぶ鉄の塊も動かなくなった。

咬んでなにが悪い！せつかく仲間である印をつけてやったのに！

ステンレス製の食器に残っていた水をちよつとずつ飲んで生きな

がらえていたが、体から抜けた毛が大量にたまっていて飲むと咳き込み、渴きを癒すのに苦しみを伴った。

鉄の塊の上部から海を見詰めた。

真つ昼間だというのに海面は黒く、飛沫もなく、光の反射もない。巨大な黒い固形物が鉄の塊の動きを停めているように見えた。冬の海は静かで不気味だった。

とある港に停泊してから無意義な時間が浪費されていく。

ミンナ…死ぬ…。

直感的な閃きが体を震わせた。

巻き添えはごめんだった。動物的勘を信じてヒョイと鉄の塊から飛び降りた。

呼び止める奴は誰もいない。未練はなかった。広い大地に立つと自由を手に入れた気がした。

港は近代的で高い建物が目立ち、埠頭の道路も碁盤の目にきちんと整備されていた。

海上を走る鉄の塊の中で争うことなくいままで縄張りを確保できたが、異国の地ではそうはいかなかった。

よそ者を拒む同類同士との争いは牙を向いて威嚇すると相手はキヤンキャン鳴いて退散した。ニヤーと声を出し、臀部を盛り上げて歯向かってきた族も敵じゃなかった。空から黒い鳥と白い鳥に隙をつかれ、魚の腸などを横取りされたのは不覚だったが、全体的にここには手ごたえのある奴がいない。

久し振りに人を咬みたいと思った。無邪気な発想からくる軽いも

のじゃなく尖った犬歯で深く食い込ませて血を流して致命傷を負わせたという病的なものだ。

いつものように港周辺を警備していると、獲物が目に入った。襲うには造作もない年配の女性。

隙だらけだが策略を思いつき、噛むという欲求をひとまず抑えることにした。この人に甘えたら食べ物を恵んでくれて暖かい寝床を提供してくれるかもしれないと思ったからだ。

軽やかなステップで近寄り、女の人の脚に顔を密着させるとスツと細い手が伸びてきて頭を撫でられた。

異国の人間とのファースト・コンタクトは大成功に終わった。

プロローグ（後書き）

この作品は完結しています。ぜひ、エピローグまで安心して読んでください。

第一章 よからぬ訪問者

悲しみは汚れる。

無意識に掘り起こされてくる過去の記憶は悲しいものばかり。なぜなんだと考える暇なく頭に浮かび上ががってくる映像は決まって後味が悪い。

嫌なことは忘れてしまえばいい。

頭を激しく振って効果を期待したが眩暈が襲ってくるだけ。嫌な思い出は工場から垂れ流され、川底に沈殿する不溶性物質のようになかなか浄化されない。

今日もその映像を見る条件が揃ってしまった。蛍光灯が点けられているのは『生活衛生課』のプレートがぶら下がっているところだけで、他の課は明かりもパソコンの電源も落されている。

事務所内に居るのはおれだけだ。

灰色の事務机の上にくつきり映っている頭の影が寂しさのあまり話しかけてきそうだった。窓の外を見ると重力を楽しんでゆらゆら舞い落ちてくる雪が情緒的な北国の冬景色を演出している。

寒い季節になるとどうしても忘れられない幼い頃の記憶が蘇る。

本日の総仕上げとなる大事な仕事をしているのに椅子の背もたれに体重をあずけて体を反らせた。体を楽な姿勢にして記憶をさかのぼらせても愉快的思い出は消滅したらしく辛い過去を受け止めるしかない。

とても幼い頃の記憶だ。

お祭りで買ったカブトムシが、翌朝仰向けになって死んでいるの

を発見したとき、心臓が押し潰されそうな衝撃を受けた。

おれはカプトムシを生き返らせようと透明なビニール袋に入れて冷凍室の奥に隠した。

自分が大人になる頃には冷温生理学が拡大に進行しているだろうと思っただからだ。凍ったカプトムシが蘇生する……時が経てば叶うんだと、そのときは思った。

7月のお祭りから5カ月経ったある日、我が家の夕食は鍋。外の寒さとは無縁の暖かい湯気が立ち込め、会話も弾んでいた。

おれより2つ年上で運動神経がそれほどよくない兄貴が地元中学校野球部のレギュラーを奪取するぞと高らかに宣言し、家族の笑いを誘った。

「先週買った牛肉がまだ残っているはずなのよ」
鍋の肉が乏しくなったのを見て母親が席を立つ。

おれは思い出せなかった。母親がゴソゴソと冷凍室の中をかき回しているときも。

「あつた！」

霜が付着して茶色が霞んでいるビニール袋を自慢げに電子レンジに入れたときも。

「ちよつと待ってね」
ピーーと解凍終了の合図をした電子レンジからそれを取り出したときも。

「変な臭いがするわ」

怪訝な顔でまな板の上に載せ、朽木を粉状に砕いたカプトムシ専

用のマットを破けた穴から指で突いているときも少し鮮度の落ちた牛肉にしか見えなかった。

「きゃー」

母親が絶叫したときにようやく夏の思い出が解凍された。

素直に謝るか笑ってごまかそうかと迷っているうちに、父親と兄貴の冷たい視線が突き刺さる。虫に限らずお祭りの露店で売られている生き物なら一通り買ってすぐに殺してしまうおれを疑わないほうがおかしい。

それからのおれは家族の中で浮いた存在となり、奇人変人扱いされることとなった。

人生の汚点第1号の出来事。

カブトムシが死んだ悲しみの記憶は汚れてしまった。

おれの心も汚れた。犬や猫の死を何度も目の当たりにするようになってから死を悼み、嘆くことを忘れてしまった気がする。

2100円。それが彼らの値段。

病気や高齢、やむを得ない事情で飼えなくなった犬や猫を保健所に連れてきて処分するときにかかる手数料がその金額。

電話で処分をお願いしてきた飼い主に手数料がかかることを告げると大概の人は一瞬の沈黙の後「かまいません」と渋々OKする。どれだけの葛藤があったのか知る由もないが、電話した手前仕方なく了承したという心境が窺える。

今日も猫が息を引き取る瞬間を見た。思い出したくなくても思い出さなければいけない。はっきりと明確に……。

カチツとボールペンのペン先を出す。

弱い筆圧で波を打ち、漢字4文字の自分の名前さえも右下がり
に傾く。我ながら下手くそな字に乾杯したくなる。見よう見まねで
初めて漢字を書いた子供の頃から進歩がない。自覚しているがどう
しようもない。

「あなたへそ曲がりだから字も曲がるのよ。もう少しまともな字が
書けないと就職できないわよ」

誰かにそんなことを言われたことがあるけれど大きなお世話だ。
書いた字が読めれば迷惑をかけることはないのだから。ただし、へ
そ曲がりには当たっているかもしれない。

ハローワークの求人カードを過剰な期待をしないで眺めていた。
完全週休2日制でそれなりの給料が貰え、楽に働けそうな仕事を
探した。そんなのまずないだろうとファイルを捲ると手がとまった。

事業名は地元の保健所。職種は臨時狂犬病予防技術員。仕事の内
容は不要犬、猫の殺処分補助。飼育管理、死体処理、抑留施設の清
掃、飼い主の相談、狂犬病予防に関する広報及び事務。雇用期間は
半年間。

まあ、半年我慢すればいいか……。

窓口に行き、面接を受けてみたいと申し出た。

2週間後に『あなたを採用することに決定しました』と、面接試
験の結果が通知されたが、他に受けた人がいないから合格できたん
だろうとおれは思った。

朝は求人にも明記されていないはずの正面玄関前と公用車の車庫と

犬舎の周りの除雪。その後は事務机に座り犬や猫に関する苦情や相談の電話をじっと待つ。

一番多い相談内容は行方不明になった犬の届出。いなくなった時刻、種類、毛の色、首輪の色、体格と性別を聞いて保護したり見かけたりした人がどこに電話するかわからないので役場の住民課と警察の拾得物取扱係にも電話するように教える。

電話は三日に一度、犬や猫の処分は週に一度あれば多い方。資料を読んだり、古い型のパソコンで簡単な書類を作成して一日を過ごす。犬や猫の殺処分を目をつぶればそれほど辛くない仕事といえる。

保健所にある資料は解釈が難しい文書が羅列されていて睡魔に襲われることもあったが、狂犬病については興味が湧いた。

発病すれば100パーセント死亡するのが狂犬病。犬や猫などに咬まれ、唾液中のウイルスに感染し、すべての哺乳動物が罹患する。

世界で年間3〜5万人が犠牲になり潜伏期間は人間だと約30日。初期は風邪に似た症状で咬まれた箇所が知覚異常となり、後に不安感、水を飲めなくなる怖水症、麻痺、精神錯乱を起こして最期は呼吸麻痺で命を落とす。

犬の潜伏期間は3週間で、後肢の麻痺にはじまって流涎や目に映るもの、例えば石など食べたり咬みついたり目に映るものすべてに攻撃的になる。

異常な声で吠え、やがて起立不能になると昏睡死する。ワクチン接種すれば予防は可能だが、いまだに有効な治療法がない恐ろしい病気だ。

保健所の臨時狂犬病予防技術員は一日の締めくくりとして必ず日誌を書くことが義務づけられ、黒い綴込表紙にはワープロの整った活字で『狂犬病予防業務日誌』とシールが貼つてある。

中身は書き込むためのたくさんの項目欄が存在する。一番上の日付から氏名、本日の業務、処分動物、処分に使用した薬物、抑留番号などの項目が並ぶ。

犬や猫の苦情と相談は『その他業務内容及び特記事項』のところに電話の内容と経緯を細かく記入する。なにもない日は本日の業務のところに『事務整理、その他』と書くことが通例となっている。

今日は『猫の処分』と記入しなければいけない嫌な日だった。

午前10時34分に電話が鳴り、女の声で飼い猫を処分してほしいとの相談が寄せられた。

猫アレルギーになり面倒を見てくれる人もいないので処分したいと言ってきた。

飼い主の判明しない野良猫や野良犬などは別にしておれが保健所に勤めてから飼っている元気な犬や猫を処分してくれと頼まれたのは初めてだ。

やむを得ない事由、回復の見込みがない重篤な疾病、あるいは老いて動けなくなり安楽死させてやりたいと処分を依頼してくるのが大方の理由。

今回はやむを得ない事由？により仕方なく猫の処分を了承することにした。飼い主がどうしてもというのならこちらに拒む理由はな

いのだ。

マスクをしてゴホゴホ咳をする弱々しい女の人を想像していたが、保健所にやって来たのはふくよかで笑顔の似合う病気とは無縁の若い女性だった。

彼女は苦笑いを浮かべながら言った。

「喘息がひどくって」

笑ってごまかせば全て許してもらえると思っている底の浅い言い訳におれは怒りを抑えて『犬又は猫の引取り申請書』を黙って突き出した。

なに、これ？という顔をして彼女は申請書をまじまじと見詰める。通常なら電話口で2100円の手数料がかかること、簡単な書類を書いてもらうので印鑑が必要なことなど説明しておかなければいけないのだが、わざと教えなかった。

彼女に対して悪意ではなく善意の不親切で説明責任を放棄する権利を行使したことに悪意など感じない。

自分の飼っているペットが原因で病気になった腹癒せに処分を依頼してきたのか、それとも世話をするのが単純に嫌になったのか、どちらにしても粗雑な動機で一々処分をお願いされてはたまらない。

申請書を記入してから彼女の表情は曇りがちになる。手続きが意外に面倒なことがわかったからだろ。印鑑がないので証紙の割印はボールペンで名前を書いてから丸で囲んでくださいと指示した。

お金がかかることは予想の範囲内だったのか素直に支払ったが、

バケツト・キャリーに入れてきた猫を保健所の裏にある別棟の犬舎まで運んでくださいとお願いすると不服そうな顔をした。

別に意地悪をしたわけじゃない。飼い主にしか従わない犬や猫がいて逃げ出さないための予防策としていつもそうしてもらっている。

犬舎に向かう途中で彼女からひとつだけ質問された。

「いつ処分するんですか？」

彼女はこの期に及んで猫の身を案じている。

「申請書に記入してもらった時点でああなたの飼っていた猫は不要猫となり即処分することになります」

おれが無表情で振り返ると彼女は視線を逸らせた。

保健所の裏手に周ると墓そつくりの『犬魂碑』がある。処分した犬や猫に安らかに眠ってもらったためのもので従順だった家族の一員のためにお参りにくる人もいる神聖な場所。

『犬魂碑』のすぐ横にベージュ色のコンクリート造りの平屋で見ると少し大きめの物置小屋風の犬舎がある。

アルミ製のドアを開けると前室と呼ばれる四帖くらいの空間が待っている。

スイッチをONにして100ワットの裸電球を点けた。流し台に使い終わった注射器を入れる瓶型のプラスチック容器、棚には犬や猫のエサ、いままで処分されてきた犬の首輪とリードが無造作に置かれ、犬の首を押さえつけるためのペンチを大きくしたような器具などがぶら下がっている。

突き当たりに引き戸があり奥の部屋が抑留所となっている。引き戸は立て付けが悪く両手を使って踏ん張らないと動かない。開けた途端に埃のこもった臭いが鼻につき、天井が前室より低くなっているせいで窮屈な感じがする。

抑留所には鉄格子付きの窓が備えてあるが、隣接する役場の建物が自然光の侵入を阻んで昼間でも電球を点けないと薄暗い。

おれが「どうぞ」と声をかけても猫の処分を申請した若い女の方は靴底に接着剤でもついているかのように足を動かさない。

コンクリート壁に等間隔に打ち込まれている係留用の錆びた鎖、爪や歯で引つ掻いた跡、青黒い染み、隅にひっそり置かれた子犬や子猫を閉じ込めるゲージの格子は所々色が剥げて曲がっている。抑留され、必死に逃げ出そうとする可哀相な姿を嫌でも連想させる。

彼女は抑留所の入口付近にバケット・キャリーを置いて一歩も入ってこない。

「猫を出してこっちのゲージに移してくれませんか」

おれがゲージを開けると彼女はもう使いませんからとバケット・キャリーを置き去りにしてそそくさと犬舎から退散した。

少しだけ胸がスウーとした。

彼女が哺乳類のペットを飼うことはしばらくないだろう。

おれは日誌に視線を落とす。

抑留番号の欄に今回は記入が必要ない。役場や警察が拾得して首輪が付いて人間に飼われていた形跡がある犬は土日プラス三日間だけ公示し、抑留番号がつけられる。飼い主が現れれば返還するが、

公示日が満了すれば処分するしかない。

彼女が連れてきた猫は当日処分することになるので抑留番号が不要。飼われていたときには名前がつけられていただろうが、最期は番号さえつけてもらえない。

種類の欄に雑種、毛色は黒、性別はオス、体格は中型、処分という欄には当日、そして処置には薬殺と書く。

犬や猫を薬殺するには細かい規定がある。薬品保管要領により危険薬品受払簿に管理状況を記録する。保管庫には『毒薬』の表示をして薬事法第四十八条により保管庫は施錠する。薬事法第四十四条により直接の容器又は直接の被包に黒地に白わく、白字をもってその品名及び『毒』の文字を記載する。

薬殺とは犬や猫を安楽死させるためネンブタール注射液を前投与して意識喪失状態にし、その間に筋弛緩剤の塩化スキサメトニウムでできるかぎり苦痛を与えずに致死させることをいう。

おれはあくまで臨時職員なので補助する役割。ナイロンの紐を引っ張ると口が締まる仕掛けの網にバケツト・キャリーから猫を移す。猫は爪でしがみついて出ようとすが揺すって落とす。軍手で網を絞って猫の逃げ場をなくして動けなくする。

注射を打つ役目は獣医などの資格を持つ環境衛生係長。猫が元気なのでネンブタール注射液を普段の倍投与してやっと眠ってもらえた。塩化スキサメトニウムを打って7分後に係長が猫の死を宣告する。

臭いを防ぐため青いビニール袋を二重にして遺体を入れ、公用車

で焼却場に運ぶ。山の麓にある焼却場まで片道30分でいける距離なのだが、あいにくの吹雪で視界が悪く、時々車を停めて吹雪が収まるのを待った。

おれが保健所に戻ってきたとき、ほとんどの職員が帰り支度をはじめていた。

人口15000人を支える総勢22人の小さな事務所に勤めて3ヶ月になるが、最後に一人だけ取り残されたことはいままでもなかった。

クリスマス・イブの夜はさすがに皆の帰りが早い。予約していたケーキを買って家族が待っている家に飛んでいくのだろう。

羨ましいとは思わない一人のほろが気楽だ。誕生日、結婚記念日など家族がいればイベント事に付き合わなければいけない。しかもクリスマスはキリスト教徒のもので仏教徒のおれには無関係だ。

送信所から標準電波を受信して正確な時を刻む腕時計がピツと鳴り、7時になったことを告げると日誌の記入は一番下の業務内容及び特記事項の欄だけとなった。

それまでポイラーで暖められていた事務所内に冷たい空気が侵入し、おれの首筋を撫でた。背骨付近の神経が体毛を逆立てる。誰かに見られている気がしてしょうがない。

職員が出入りする裏口へと通じるドアが開けっ放しになっていた。外から隙間風が通り抜けて背中を擦ったようだ。おれは安堵のため息をもらす。

ドアを閉めるため椅子から腰を浮かせると、受付台のガラス戸を

小突く音が所内に響いた。

えっ、と振り向く。

正面玄関の蛍光灯は消されているが、暗闇の中に僅かに人間らしき頭と肩口の輪郭が視認できた。

保健所は午後5時30分に受付を締め切る。正面玄関のドアは力ギをかけて入ってこられないはず。

(閉め忘れかよ！)

総務課の係長の顔が頭に浮かぶ。

受付には専門員がいて特定疾患などの相談にくる人の対応をする。専門員が席を外していても総務課の人たちが代わりをしてくれる。

受付で接客するのは初体験。うまくできるだろうかと不安と焦りが胃袋に1キロ程度の鉄球を落とした。

「はい、なんででしょう？」

ガラス戸を横にスライドさせ、覗き込みながら尋ねた。

「い、犬が……死にそうで……かわいそうだから処分したいんだ」

消え入りそうな小さな声だった。顔の3分の2は闇に紛れていたが、喉仏の辺りが筋張っている。年老いた男性と推測した。

「そうなんですか……」

おれはいかにも残念そうな表情で対応する。別に老人が不憫に思えたからではなく、電話もせずに受付時間を終了した保健所に直接やって来た常識知らずを相手にしなければいけないおれが可哀相に

なってきたからだ。

「犬を連れてきているんですか？」

「自宅から歩いて運んできたんだ」

運が良いのか悪いのかおれが扱える案件なので「担当者がいません」「窓口はすでに終了してしまいますので明日改めて来てください」などと冷たくあしらうわけにもいかず事務所から出て対応することにした。

玄関ロビーには食中毒の注意や献血を呼びかけるポスターと銀行の粗品のカレンダーが貼ってある。簡素な応接セットのテーブルには朱肉と老眼鏡が添えてあるだけで殺風景だ。

「どござ」

椅子に座るように促すとようやく老人の顔がはっきり認識できた。

向き合って座った老人はグレーのニット帽を被りボア付きの紺のジャンパーを着ていた。ひどい猫背で顔を亀みたいに出し、両サイドのポケットに手を突っ込んでこちらを凝視する。眼窩が凹んでいるから眼球が異様に突き出て、頬がこけ、針金のように細い血管が浮かんだ首筋の筋肉はそげ落ちている。

「飼い犬ですか？」

「んっ……」

首を横にも縦にも振らず『はい』なのか、『いいえ』なのか煮え切らない答え方をする老人におれは苛立ちを感じた。

飼い犬なのかそれとも野良犬なのかは重要な質問事項だ。もし飼い犬なら2100円の引き取り手数料が発生するし、拾得した犬や猫なら無料となり書いてもらおう申請書の様式も違ってくる。

会話をして感触を探らなければいけない。

「飼い犬が病気なんですか？」

問いただしても老人はだんまり。

「飼っている犬が病気なんですね」

おれはイラツとする感情を押し殺しながら念を押した。

「はい」

老人からはつきりした返事をもらい、おれは椅子から立ち上がる。

「申請書に記入してもらうのでちょっと待ってください」

自分の机の引き出しから別記第19号様式『犬又は猫の引取り申請書』の用紙とボールペンを持ってロビーに戻ると老人は机の一点を見詰めたまま固まっていた。

「ええ〜と、まず日付から書いてください」

用紙の上にボールペンを置き、老人が動くのを待つ。

老人はポケットからゆつくりと右手を出した。骨に皮がべったり張り付いた貧弱な手だった。ボールペンを持っただけでポキッと折れそつだ。

「今日は何日かな？」

(何月かな？と聞かれないだけマシか……)

「24日です」

おれが日付を教えても老人は申請書に記入できなかつた。手が震え、ペン先を用紙につける寸前に取りやめた。カタカタカタと膝がテーブルに当たっている。小さな地震が老人の周りで起こっていた。

「外は寒かったですか？」

おれが気遣って訊くと、老人はぎこちない笑顔で答えを表現してきた。寒さは関係ないのかもしれない。慣れない役所での手続きに緊張しているのだろう。

名前と住所を書いてくれたのが4分後。手が覚束おぼつかないわりにはおれより字がうまかった。

中野源一郎……住所は町内。

犬や猫に関する手続きは免許証や保険証を提示する義務がなく、本当に本人なのか身分を証明する必要性がないので住所と名前の虚偽を再確認することはしない。あくまで飼い主を信用するしかないのだ。

名前を書いてから老人の手がまたとまった。犬の特徴を記入する欄で頭を悩ませている。

おれはやさしくボールペンを奪い取り、申請書を回転させた。

「犬の種類は？」

と訊く。

「ぎ……雑種か……な」

おれは種類の欄に雑な字で『雑種』と記入して矢継ぎ早に質問した。

「毛の色は？」

「白……いや薄茶かな」

「どっちなんですか？」

「薄茶」

「性別は？」

「どっちだったかな」

オスカメスカはあとで調べればわかることだが、犬には無関心なようだ。身勝手な好奇心から野良犬を拾い、飽きて世話をしなくなり、飼育することを放棄して保健所に連れてきたことが容易に想像できた。

「不妊処置はしていますか？」

無駄な質問だと思いながら取敢えず訊いてみた。

「わからない」

「犬の年齢は？」

「九歳くらいじゃないかな」

「登録はしていますか？」

という質問をしたとき、老人は視線を斜め上に向けて考え込む。

「しているんですか？していないんですか？」

おれは訝った。老人の態度が気に食わない。記憶検索中のポーズを取っているのだが、はぐらかしているだけにしか見えない。

「役場の住民課で犬を登録した記憶はありますか？」

「わ、忘れました」

老人は明らかに動揺している。やはり野良犬を拾って登録もせず
に飼っていた可能性大だ。

「登録しているのであれば明日にでも役場の住民課にいつて犬の登録を抹消してもらってくださいね」

一応勧告した。

「わかった」

ようやく最後の質問を残すだけとなった。保健所では毎日たくさん書類が上司の机を通過するが、申請理由の項目だけはチェックが厳しく、記入もれがあれば注意を受ける。

「犬が病気だから安楽死させたいんですね」
申請の理由をこり押し気味に『病気のため』を勧めた。

引き取り理由で27・2パーセントが無計画な繁殖によるもの。犬が問題行動を起こすが16・7パーセント。飼育者が高齢や病気で飼えなくなつたが14・2パーセント。引越しが14・1パーセント。

動物の病気が13パーセント。飼育者のアレルギーが1・7パーセント。その他が13・1パーセントというデータがあるのだが申請理由の欄になんて記入したらいいのか迷うのは老人だけじゃない。迷える元飼い主たちには『病気のため』と無難な理由を選択させる。

（おまえが病気なんじゃないのか！）

申請書を書いてもらう度に何度口から出そうになったことが……。

『病気のため』を殴り書きした。

さつさと手続きを済ませたかった。老人と向き合って座っている時間がたまらなく嫌になってきた。

「2100円の手数料がかかるのですが、お金はお持ちでしょうか？」

老人は小刻みに頷きながらズボンのポケットから小銭を出して指で数え、500円玉4枚と50円玉2枚をジャラジャラとテーブルの上に散らす。

「犬はいまどこに？」

と訊くと老人は腕を水平に伸ばして人差し指で受付台の下を示した。

その方向を見て2キロ程度の鉄球がおれの胃袋に追加された。

受付台の下には異様な様相を呈した段ボール箱がひっそりと置かれていた。

ガムテープでぐるぐる巻きにして過剰なほどの目張りをして縦、横、斜めから荒縄でがんにがらめにされている。角が凹んでお歳暮で贈られてくるハムに似ていた。

段ボール箱に入っていた野良猫を拾い、飛び出して逃げられるおそれがあるので粘着テープで封をしてきた人はいるが、これほど嚴重に梱包してきたのを見たことがない。

「随分と用心深いですね」

荒縄を解いてガムテープを剥がしていく手間を考えると嫌味を言わずにはいられなかった。

「歩いて運んでくる途中で落として穴を開けないためだ」

廃校に置き去りにされたピアノの鍵盤のようにほとんど抜けた歯を見せつけて老人が微かに笑う。

「犬舎まで運んでもらえますか？」

おれは事務的な口調で指示した。お年寄りに思いやりがないと言われそうだが、自宅からここまで運んできたわけで無理な注文とは思わなかった。

老人は驚いた表情で目を大きくする。ワシが運ぶのか？という心

理がありありとわかる動揺ぶりだ。

「あつ、いいです。私が運びます」

前言を撤回した。おれは人として欠けているところがあるようだ。それがなんなのかをじっくり考えて反省しようなどとは思わないが……。

段ボール箱を間近で見ると空気穴さえないことがわかり、おれの眉は気遣わしげに寄った。

「死んでるんじゃないですか？」

犬が密閉された空間に閉じ込められているとなると窒息死しているかもしれない。そうなれば対応が変わってくる。

道路なのですでに死んでいる犬や猫の遺体は役場の住民課が処理することになっている。いわばゴミ扱いされ、町外れの焼却場へ直行する。死んだ犬や猫を保健所に持ち込むことはお門違い。

「そりゃない」

老人は早口で否定した。

「そ、そうですか」

老人が断言した言葉を半信半疑で受け止めた。

「いつ処分するんだ？」

本日二度聞かれることになってしまった質問。もう飽き飽きする。

元飼い主は同じことを訊く。往生際が悪い。覚悟を決めて犬や猫を保健所に連れてきたんじゃないのか？面倒見ることが諦めた元飼い主にいつ処分するかなんて質問はナンセンスだ。

自分に落ち着きがなかった。申請書の記入が終わってから老人の態度が横柄になり臆病風に吹かれた。

「頼む！なんとかしてくれえ〜」

怒っていたかと思うと今度はがっくりと膝をつき狼狽する老人。

「だ、大丈夫ですか？」

おれは老人の落胆ぶりに目を白黒させた。

「せっかく苦勞して閉じ込めたのに……」

老人が悲哀を主張してよろめきながら自力で立った。両手に握り拳を作り、斜に構え、眼光鋭くおれを睨む。『怒り』を表現するにはあまりにもわかりやすいポーズ。その幼稚さゆえ、なにをしてくるかわからない恐怖がおれを襲う。

「あんた段ボールを開けるのが怖いんだろ。責めはしないさ、触れないのは賢明だ」

挑発するような発言をした老人は、それきり段ボール箱を直視したまま動かなくなった。

殺さないと大変なことになると言っておきながら触れないのは賢明だと言う。この老人は相当もうろくしているようだ。

（開けるか……）

段ボール箱に入っている犬の生死を確かめないことには何も先に進まない。生きていれば置いて帰ってもらうし、死んでいれば持ち帰ってもらう。

だが、中身を確認することが急に困難な作業に思えてきた。もしかして犬が恐ろしい病気に感染しているのではという勘繰りが頭の中を駆け巡り、恐怖が増殖して行動を鈍らせた。

狂犬病の資料なんて読むんじゃないかなかった……。

「フラン犬^{ケン}って知ってるか？」

老人が重い口調で尋ねる。

「知ってますよ」

フラン犬が話題になって1年しか経っていないのに随分懐かしい過去の出来事のような気がする。

フラン犬の第一発見者は下校中の小学生で住宅街の一角を曲がると様々な模様で継接ぎの皮膚を移植された犬と出会った。

白地に黒い斑点がついたダルメシアンと思しき皮膚^{おぼ}や茶色の長い毛の部分もあれば灰色、黒、焦げ茶などセンスの微塵も感じられない配色で縫い糸の痕も痛々しく、右と左の耳も不揃いで元々がどんな犬だったのかわからないくらいパッチワークのような小片だらけにされたその犬は吠えるなどの敵対行動を取らずに小学生の前を悠然と横切った。

家に着いた小学生はさっそく母親に報告した。

「本物の雑種を見たよ」

犬は町を徘徊して自分を宣伝して回った。

異常者が医者^ケの真似ごとをして実験材料にされた犬ではないかと噂^ケが広まり、報道されてフランケンシュタインからもじってフラン犬と命名された。

捕獲する場面が地元のテレビニュース番組で放送されると飼いたいという物好きたちから問い合わせが殺到した。

話題を利用して一儲けしようとする映画まで製作される過熱ぶり。子供を使いフラン犬との触れ合いを描いたものだが、映画は2週間で打ち切りとなり子供と動物を起用すれば必ずヒットするという法則は通用しなかった。

物珍しさからわいたフラン犬の奇妙な人気は一気に冷め、フラン犬も誰が引き取ったのか不明で良い飼い主に巡り合えたとか、車に轢かれて死んだなんて噂も流れたが、事実も藪の中。

「見た目はフラン犬ほどじゃないが、そこに入っているのは……」
老人は意味ありげに言葉を切った。

そのとき、ガサ……ガサ……と段ボール箱が揺れた。

これで中身の犬を引き取る権利が成立した。犬が生きているのであれば保健所が最期の始末をする。

老人は視線を下に向け、眼球を動かして面白みのないリリウムの床を探索している。これから不吉なことが起こることを助長する挙動不審な仕種だ。でも、念のために中身を確認しなければいけない。

平静を保ちつつ屈んで段ボール箱に触れると中からドンと音がした。段ボール箱が数センチ横にずれておれとの接触を嫌う。

悲鳴こそ上げなかったが、手をカメレオンの舌のように引っ込めてしまう失態を演じてしまった。思わず照れ笑いを浮かべたが、老人は目を床に落としたままなのでみつともないところは見られていない。

改めて気合を入れなおし、段ボール箱に括られている荒縄を解こ

うとした。指先の力だけでは結び目が固くて緩まない。

世間の人たちは浮かれ気分でクリスマスプレゼントの包装紙を破いている頃なのにおれは有難迷惑な箱を開けるのに四苦八苦している。

(あつ、そうだ！)

おれは尻ポケットから先端鋭く尖った千枚通しを取り出して荒縄の結び目に突き刺す。

どうしてそんなものを持ち歩いているんだ？

もしそんなことを尋ねられても答える義理はないし、正直に答えてしまったら老人はショック死してしまうのではないだろうか。

千枚通しで結び目をほじり、荒縄を解き、ぐるぐる巻きのガムテープを全て取り除くときつく縛られていた反動なのか段ボール箱は長時間雨ざらしにさらされたように型崩れしてふにゃふにゃ。

段ボール箱をいじくりまわしているとき、犬は一度もワンという擬声語を発しない。それどころか息遣いも聞こえてこない。

凶暴なうえに冷静さを持ち合わせているのかと犬の性格分析をしているとガサガサガサとさつきよりも速いテンポで動いた。無抵抗で貧弱な段ボールの壁を相手に爪を研いでいる。

いつか飽きるだろうと静観していたが、爪がむず痒いのか、外の世界に飛び出したいのか、かきむしる音は一向にやまない。

裂け目ができた。斜めに三本、カッターで切りつけたみたいに切り口はシャープ。中の様子が垣間見え、薄茶色の毛は申請書どおり。

犬独特の世話しない動き……後にストレスを爆発させるだろう。
段ボール箱が破壊されるのは肯定的な事実。

次から語られた老人の話はできることなら否定したい。おれの胃袋にまたしても鉄球が1個追加されて負担となったのは少しでも信じてしまった証拠だ。

「気をつける！その犬の好物は血……血なんだ！」
フラン犬^{クワン}の話をしたあとにドラキュラ犬とは……。

「ワシは病気の妻を残して出稼ぎしているんだが、ことの始まりは3週間前の電話だった。“寂しいから犬を飼うことにした”と。ペットショップで犬を飼うお金なんてないはずだからおかしいなと思いつい、どうしたんだ？と訊くと妻は笑って言った。“捨ったのよ”って。2週間前の電話では“犬がエサを食べないの”と相談してきた。1週間前にも電話があった。“実は家に来てから水を飲んでいないところを見えないの”と。妻はひどく落ち込んでいた。おまえが寝ている間に飲み食いしているんだろうと言うと不満そうに“そうかしら”と返事して電話を切った。5日前の電話では元気のない声で“水とエサの容器の重さを量って確かめたけれどどっちも減っていないかった”と訴えてきた。ワシは怒鳴った。そんな犬捨ててしまえ！とな。すると妻は黙って電話を切った。そして2日前にかかってきた電話で妻が言った。“やっと犬の好物がわかったの。血、私の血をおいしそうに飲んでくれたのよ”と喜んでいた。それが妻の声を聞いた最期になった」

拙速すぎるかもしれないが最期という言葉の裏に死が見え隠れしている。どこまで作り話なのか、聞いていて気分が悪くなった。

全部作り話だ。老人が犬を処分したがっている気持ち、人間の気分次第で処分されていく犬の気持ち、保健所では人間の醜い心は2100円で報われ、犬の純粋な心は踏み潰される。

「この段ボールに入っているのがお話の犬なんですか？」

黙っているとまだまだ鉄球が増えそうだった。胃の重たいものを排除するために思いついた質問を頭の中で整理しないでぶつけると、老人は当然だろうとでも言いたげに険しい顔でおれを見る。

段ボール箱に入っている犬を不要犬と完全に確認したわけではないが、これ以上老人からくだらない話を聞かされ暗い気持ちにさせられることはない。

「あつ、もういいですよ。どうぞお引取りください」
手続きを打ち切った。

最後に聞かなければいけないことがあるのだが今回は省いた。薬殺した後の遺体を持ち帰り民間のペット霊園などで手厚く葬るか、保健所に遺体の処理を任せてもらえるのか選択してもらうことになっている。老人は犬を厄介払いしたいのだからペット霊園に持っていくことは考えにくい。

「おい、見ろ！」

老人が後退りをはじめた。

段ボール箱を食い千切り、前肢で引き裂き、大きな穴をこしらえるとそこへ頭をねじ込み、頭を振りながら穴を広げて突き破る。段ボールの破片をくわえたままひどく痩せ細った犬が顔を上げた。

毛は白に近い薄茶、目が小さく鼻がピンク色。シンプルな容姿に

滑稽ともいえる派手な色が顔の中心に配置されている。神々の悪戯によりデザインされたブサイクな犬。くたびれた革製の首輪をしていてロシア語らしき文字が刻まれていた。

老人が警戒するほど怖さは感じない。見れば見るほど哀れに思えてくる。

犬は全身を見せびらかすように180度回転した。向かって右側の毛がきれいに抜け落ち、赤い肌が露出されている。

犬は毛がなくなるとこうなっているんだと漠然とした感想をもった。

「どうして毛がないんですか？」

少しでも犬を刺激したくないとの配慮なのか、老人は囁くようにおれの問いに答えた。

「ストレスのせいだ」

「ストレス？」

聞き返したが老人は沈黙。

少しわかったことがある。老人は言いたいことだけ言うと黙ってしまう。熱しやすく冷めやすい。天気のように気分がころころ変わる。根本的に我がままな性格に違いない。

グルルル……。

犬が唸った。頭は低く、背中を波のように隆起させて屈伸運動をする。瞳孔を拡張させて跳びかかる準備を整える。

目が合ってしまった。ターゲットはおれらしい。

「よしよし」

警戒心を解くために屈んでやさしく声をかけたが、犬は尻尾を振らず、逆に高らかに吠えて自己防衛反応を覚醒させる。

「そんなことをしても無駄だ」

老人が嫌悪感を滲ませながら言った。

そして、おれの腕を掴む。

「逃げるぞ！」

老人の強制的な指示を即座に受け入れられず、屈んだままの姿勢で躊躇していたおれの隙を狙い、犬が突進してきた。避けきれずに犬の頭がまとも顎を直撃しておれは後頭部を強かに床に打ちつけた。

“痛い”という神経が作動したのは一瞬だけ。視界が白濁し、意識が遠のき、意外と気分は悪くない。視界が正常に機能していないのに恐怖心は不思議とわいてこなかった。

第二章 過去の闇（前書き）

ここから精神崩壊がはじまります。

第二章 過去の闇

お……おっ、お……い、おい。

誰かの声がある。嘎れ声で聞き取りにくく、しつこいくらい呼びかけてきて、ついには脳へ浸透してくる。体の組織が根こそぎ毒されそうな汚い声だった。

瞼をなんとか開放させ、相手を見る。目に映ったのは揺れ動く白い天井。

上半身を起こして頭を振ってみる。視界が捉えたのはうねって変形している年老いた男の顔だった。会って間もないのになぜかうんざりする顔だ。

「大丈夫か、ワシがわかるか？」

老人が心配顔で尋ねてくる。

申請書に記入してもらった名前が思い出せず、頷くだけにした。

「ここまで運ぶのに苦労したぞ」

恩に着せる言い方をされ、すっかり見下されている。

周りを見た。事務所内の隅で大の字に寝かされているおれがいた。両脚が伸びきっていることから老人が引きずってここまで運んできたらしい。

「犬は？」

咄嗟に出た言葉だった。目を左右に走らせ、遅ればせながら警戒心を張る。

老人は力なく首を横に振った。

「とにかく捕まえないと……」

頭を強く打ったせいでふらついた。犬を野放しにしておくわけにはいかない。引き取った犬を逃がしてしまつては保健所としての面目は丸潰れ。しかもそれが危険な犬と知られたらおれが始末書を書くだけで済む話ではなくなる。

「無理しないほうがいいんじゃないのか？」

老人が遠慮気味に自重を促す。

「いや、責任問題になりますから」

「ワシが黙っていれば誰にもバレないだろ」

と言つた直後の老人の目から放射状に皺が伸びた。秘密を厳守できるとは到底思えない偽りの笑顔。

「襲い掛かつてきたあと、犬はどうしてました？どこにいったかくらい教えてください！」

拒否されないためにきつめに問い詰めた。

老人は真顔になる。顎だけを使って腹話術の人形みたいに下唇を上下運動させて喋つた。残念ながら出てきた言葉は的外れ。

「早く逃げたほうがいい」

老人に従うことなんてできない。犬の行方を白状しない理由が不明で不可解で不愉快だ。

（構っていられるか！）

犬を探すため正面玄関へ向かおうと一歩踏み出す。靴底に細かくて硬い塊の感覚が伝わってきた。歩きたびにジャリ……と音がする。床を見るとキラキラ光るものが帯状に広がり、裏口へと導いていた。

(ガラスだ……)

目の焦点を合わせる。靴の爪先でそれを擦って再び感触を確かめた。

(どこの窓が割れたんだ?)

不安と疑問を背負いながら裏口へ小走りで向かう。

職員専用トイレ、ボイラー室、給湯室、休憩室、女子更衣室などを通り過ぎるとき、強烈な寒風が突き抜け、職員専用ロッカーの扉を乱暴に開けた。

“寒い”という思考に取り付かれるとおれの足がとまった。すきま風にしては破壊力がありすぎる。風が吹き込んでくる先に目を凝らすとドアの窓ガラスに中型犬が優に入ってこれそうな穴が開いていた。血痕らしき赤い斑点も見つけた。

外へ逃げたわけじゃないらしい。ガラスの破片と血痕が建物内にあるということは外から中へ入ってきたということだろう。犬は正面玄関から外へ出て、裏口からガラスを突き破ってまた保健所へ入ってくる意味不明な行動を取ったとしか思えない。

まず裏口付近の各部屋を探すのが順番として妥当だろう。職員専用トイレ、ボイラー室、給湯室は空振りに終わった。残りは休憩室と女子更衣室だけとなったが、ドアが僅かに開いている休憩室からブーンというモーター音が聞こえてきた。

肝心なことを忘れていた。保健所では民間の警備会社に夜警を委託している。確か名前は竹山さん。警察を退職して60歳を超えているわりにはがっしりした体格で真面目そうな人。廊下ですれ違うとき、必ず先に挨拶をしてくれる。犬を取り押さえるにはこのうえ

ない味方がいた。

だが、休憩室は暗く、人の気配がない。

トイレ？もしかしたらどこかを見回りしているのか？所内にいるはずだから騒ぎに気づいていないのはおかしい。

電気を点けた。豊四帖半の休憩室には必要最低限の電化製品が揃えられている。テレビは調子が悪いらしく、前触れなく電源が切れることがあるので、警備員の竹山さんが総務課に修理をお願いしていたのを見かけた記憶がある。

テレビの画面が真っ暗なのはわかるとして、石油ストーブと電気コタツが点けっぱなし。飲み欠けのコーヒーが入ったマグカップがコタツの上に置かれている。休憩室に漂う生活感が竹山さんのものなのは明らか。

犬もいなければ警備員の竹山さんがいない休憩室にはもう用はない。しかし、あるモノを無視しようとしても視線が吸い寄せられてしまう。なぜならその白いドアに赤い斑点が付着しているからだ。

(まさか……)

冷蔵庫の中に身も凍るモノが入っているのではないか。警備員の竹山さんが殺人鬼の狂気によりぶつ切りの肉の塊となって保存されている……途方もなく恐ろしい妄想が浮かんだ。

おれは小心者だ。不安要素がすぐに頭を支配してしまう。カブトムシを冷蔵庫に入れたことを忘れ、一家団欒のひと時を台無しにした過去が冷蔵庫に対して嫌なイメージを植え付け、記憶の基礎となり根となって離れないでいる。

記憶は引きずる。

おれが現在一人暮らししているアパートに冷蔵庫はない。だから自分で料理して食べる習慣がなく、もっぱらコンビニの弁当かカツブラーメンで空腹を満たし、夏場は近所の自動販売機で冷たいものを買って喉を潤す。

生活するうえで冷蔵庫は欠かせないと思っっている人は多いかもしれないが、慣れとは恐ろしいものでいまでは不便さを感じない。無理をしているわけでも意地を張っているわけでもない。

冷蔵庫の存在を消して苦い記憶を掘り起こさないための策だが、100パーセント排除することは困難。テレビで冷蔵庫のCMが流れるたびに胃が重くなる。おれの生活空間に冷蔵庫があったらと思うとゾツとする。

きっとストレスで体が象のように重くなって床を抜け、奈落の底に落ちてしまっただろう。でも、いつかは克服しないといけない。

(冷蔵庫の扉を開けたらどうなる?)

“毒をもって毒を制す”ということもある。冷蔵庫に触れたら免疫ができて記憶の呪縛から解放たれるかもしれない。

気づけば右手が伸び、取っ手を掴んで扉を開けようとしていた。同時に過去の忌まわしい記憶の扉を完全に開けてしまい、蘇った鮮明な映像に押し潰されやしないかと逆の発想も働く。

結局は躊躇してしまった。

「畳の部屋に土足で上がっていいのか？それにそんなところに犬は

いないだろ」

突然背後から老人に声をかけられびっくりした。

「いや、ここに……」

冷蔵庫の赤い斑点を見せようとすると、扉は真っ白。てんとう虫でもとまっていたのだろうかと考えたが、いまは冬だ。さっき見たものは幻覚で片付けるしかない。

「あんた臨時職員だよな」

「ええ」

「机の上に臨時……狂犬病予防……なんとかいうプレートがあったんだが、あれがあんたの正式な職氏名か？」

「そうですが……」

「二つ質問していいかな」

「えっ？」

おれは不快な顔をしてわざと聞こえない振りをしたが、無下に断るわけにもいかない。

「ええ」と臨時……」

「臨時狂犬病予防技術員です」

「そうそう、どうしてそんなに長い職氏名なんだ？」

「狂犬病が恐ろしい病気だということを保健所はアピールしたいんじゃないですか……それと……」

思わず本音が出そうになった。抑留した犬と猫の尿や糞の始末や遺体の処理をさせるために公務員以外で地元の人に大層な職氏名をつけ、汚くて面倒な仕事を押し付けるために日給で雇っている……

それが真意じゃないだろうか。

「それと？」

「いいえ忘れてください。次の質問をどうぞ」

本音を喋ってもただの愚痴になっってしまう。おれは二つ目の質問に移ることで本音を心の奥に押し戻した。

「どうして臨時職員の若い兄ちゃんが一人だけこんな時間になるまで残ってるんだ？」

浮かない顔をして老人が尋ねてくる。地方の保健所とはいえ頼りない若者が一人でいるのは不思議なのだろう。

「今日はクリスマス・イブだから皆さん急いで帰られたみたいですよ」

「あんたは？」

「キリスト教徒じゃないんで」

老人に馬鹿ウケした。尋常な笑い方じゃなかった。鋭利に口角を上げ、笑い声は甲高く、耳の鼓膜を不快に刺激した。

おれは両耳に手を当てたが効果なく、いつまでも下卑た笑いもれてくる。

老人の唇が裂け、音量が倍増した。

耳、口、鼻、体の穴という穴、皮膚の毛穴までも栓でふさいで肌で感じる老人の声を拒絶したい。

おれは立っているのが不思議なくらい平静を失いつつあった。これは現実じゃないという確信めいたものがない。客観的な立場で見るとしか平常心を保てそうにない。

さらに老人の頬骨が突き出て皮膚を破ると脈絡なく真っ白い光が

射した。眩い光なのにどこか陰に染まっている気がした。老人から発せられたにしてはエネルギーがギッシユすぎる白い光が不釣り合いで陰の部分を感じるのかもしれない。

（知覚を疑え！）

と、強く念じたが信じられない超常現象はまだまだ続いた。

笑い声と比例して白い光が辺りを取り囲んだ。老人の影が白い光に引つ張られ流動線となり細長い渦巻き模様を形成した。気づけばトンネルのような空間におれがいる。トンネルの奥は段々と狭くなつて出口がどうなっているのか不透明。目がチカチカする。上下左右の区別がつかなく平衡感覚が狂う。数秒で渦巻きの回転がおさまりトンネルから抜けられたが、おれの目に異変が起きた。周りが白黒に見える。色覚を見分けることができない。手で目を擦っても回復の兆しがない。

呆然としていると…。

「ちよつとなにしてるの？早く座りなさい」

聞き覚えのある声に急かされた。その声には幼い頃から当たり前のように注意され続けてきた。だから当たり前のように自然と椅子に座り、当たり前前のように茶碗を持ち「お母さん」と言つてご飯を装ってもらつた。

テーブルにはグツグツ煮えたぎる土鍋がガスコンロの上で踊っていた。睡で喉をゴクンと鳴らす仮想の食事では我慢ならず、牛肉に狙いを定めて鍋に箸を突入させた。

「ずるいぞ、ヤス」

兄貴はおれを非難したが口元は緩んでいたし、父親は微笑ましく二人のやりとりを見ていた。

いただきますを言う前に兄貴が対抗心を燃やして牛肉を食べたら母親からきつい教育的指導がおれたち兄弟に実行されていたろう。しかし兄貴は絶対にそんな下品なことをしない性格なのをおれは見抜いていた。だからフライングをして甘えた。

白いご飯が盛られた茶碗が行き渡ると「いただきます」を家族全員で言う儀式へ。そして、いざ鍋へ……と思ったら、母親に「ふざけないで！」と叱られた。おれの口にまだ肉が残っていたので「ひやだきます」と発音してしまったからだ。兄貴と父親は腹を抱えて笑う。

ゴングが鳴れば兄貴も肉食獣へと変貌する。冬の野球部の練習は夏場よりも厳しく、持久力をつけるために雪が積もったグラウンドを走らされ、体育館に戻ってからも体が悲鳴を上げる柔軟体操が延々と続く。兄弟は食べ盛り。従って肉はあつという間になくなる。

「野菜も食べなさい」

母親からの指摘をおれは無視したが、兄貴は素直に野菜に手を付けた。嫌そうな顔をしないで食べるところが兄貴のすごさだ。

「先週買った牛肉がまだあるはずなのよ」

母親の顔は計算づくだという自慢がみなぎっていた。

(どこかで……既視感だ)

どうしておれは過去の記憶の中に存在しているんだ？これは観念的なものが膨らんで画像的に表現されたものとは違う。鍋を食べ、味覚、嗅覚、触覚までも感じている。かなり深刻な精神疾患を抱え、受動感を伴った幻覚を見ているのか？

母親は冷凍室を開け、牛肉を探しはじめていた。

「ぼく、もう肉食べないよ」

「肉を食べるのはあんただけじゃないのよ」

おれは母親に肉を探させるのをやめさせようとしたが、あっさり失敗。「ぼく」と子供口調になっている自分にも驚いた。あとは力づくで、制止するしか道がない。

(過去を変えるんだ！)

「ねえ、ぼくが探すよ」

小さくなったおれの体は母親と冷蔵庫の間に容易く入ることができた。

「どこにあるかわからないでしょう?」

意外なほどにこやかな顔で母親はおれの厚意を退けようとする。

「冷凍室でしょ、任せて」

おれは子供らしい笑顔で積極的な態度を意思表示した。冷凍室の扉の取っ手を背伸びして掴む。

横で母親が心配そうに見守る中、おれは扉を開けて隙間なく積み重なり冷凍保存されている食材に手を伸ばした。当てずっぽうで冷たい塊を引っ張り出すと、鮭の切り身や電気炊飯器に残った白いご飯をラップで包んだ非常食ばかり出てきてお目当てのものに行き着かない。

とにかく牛肉を見つけないと……牛肉よりも先に冷凍保存されたカプトムシを手にしてしまったらどうやって言い訳すればいいのかわからない。素直に謝れば許してくれるだろうか?母親の気性からすると望みは薄い。

冷凍室に手を突っ込んだまま静止していると、母親の険しくなっている顔を見てしまった。

「なにやってるの？」

怒りがふくまれた声に敏感になり考える余裕がなくなったおれは適当に選んで掴んでいた塊を床の上に滑り落としてしまった。

ゴツンと硬い物同士がぶつかる鈍い音がして塊は霜散し、ヒビが入り、カブトムシの特徴である又状の角があらわになる。

（いつもこうだ……必死にがんばろうとしても結局は悪い方へ運命が向かってしまう）

光沢が失われた黒褐色の突起物を見た母親は悲鳴を上げ、おれは発作的に激しく首を左右に振る。自分のせいじゃないとアピールしたい黒い心が作用した。

「どうした？」

椅子を倒して父親が立ち上がる。

「げっ、カブトムシ」

兄貴の言葉が告げ口に聞こえ、父親の顔が鬼の形相に見え、胃袋を突き破る勢いで鉄球が2個、3個、4個と立て続けに落ちてくる。

体重は無限。足が床にめり込む。手を使ってもがいたが抵抗むなしく沈んでいく。遊泳禁止区域で誰にも気づかれず溺れていく愚か者の気持ちがよくわかった。

必死さが伝わらないもどかしさに苛立ち、意味不明な奇声を発しても家族3人の態度は冷酷で落ちていくおれを黙視している。

おれの目に涙がたまる。まるで抑留所で処分される寸前の犬や猫

と同じだ。彼らは注射針を見て飼い主に見捨てられた事実を悟り涙目で訴える。

殺さないで……と。

その慈悲が救われることはない。

真つ暗で無味無臭。浮遊感さえ味わえない空間におれは引きずり込まれた。黒い空間を鷲掴みするとツルンとした感触で指の間から擦り抜ける。摩擦力がないのに体はゆっくり降り下していく。安くて水っぽいコーヒーマスター・ゼリーのの中にいるみたいだ。

この穴はどこへ通じているんだ？出口はあるのか？底があるのか？おれは死ぬのか？それとももう死んでいるのか？ここは地獄へ通じる穴なのか？

ひどい仕打ちだ……カプトムシを冷蔵庫に入れただけなのに……石を投げれば当たりそうなく有り触れたただのうっかりミスなのに神様は惨いことをする。カプトムシを生き返らせたい！ただその一心でしたことが人生の障害となって結局はこの有様だ。

諦めが死に直結することは感じていたが、おれは力を抜いた。悪い癖が出た。生きることが諦めてしまった。

狂犬病予防業務日誌

第三章 おれは誰？

どうもおれは今日死ぬらしい。

車に轢かれそうになったり、庇から氷柱が落ちてきて背中を掠めたり、死神が手招きしているようだ。

頭が痛い。

一体おれは……犬に襲われて床に後頭部を打って……気を失っていたのは一瞬だったと思うが嫌な夢を見た。忘れよう。自暴自棄になるだけだ。

(犬はどこだ？老人もどこへ消えた？)

頭が重い。

余計なことは考えず、早く日誌を書いて帰ろう。老人が犬の処分依頼にきたことはおれが黙っていれば露見しない。所内は静かだし、きっと犬と老人は出て行ったに違いない。

せめて犬を入れてきた段ボールを片付けて申請書をシュレツダーにかけて証拠隠滅しないと……お金はどうしたのだろうか？ちゃっかり持ち帰ったのか？割れたガラスの後始末と言い訳を考えないと……。

いずれにしても確かめるために正面玄関へ向かわなければいけないと思った瞬間、夜のしじまを電話のベルが切り裂いた。

(まったたく！)

心の中の悪態を静め、正面玄関に一番近い総務課の電話に出た。

「もしもしT地域保健所です」

「そちらに犬の処分をお願いにきた人はいませんか？」

声は中年の女性。初めて聞く声のはずなのに記憶をくすぐられた。でも、その要因がなにかはわからない。電話の相手が早口で尋ねてきたせいもあって、じっくり考えるゆとりがなかった。

「来ていませんよ」

白々と嘘をつく。

「そうですか……」

受話器から落胆した声がもれてくる。

「どうかされました？」

「主人が保健所に犬を連れていくと言ったきり帰ってこないんです」

「それは心配ですね」

と、おれが言ったあと、しばしの沈黙。抑揚をつけずに喋ったので言葉とは逆の意味に、つまり本心では心配なんかしていないことが見破られたかもしれない。

「あのうー、もし主人が保健所に来ましたら、犬の処分を思いとどまるように説得してもらえませんか？」

心配していたのは旦那よりも犬の方らしく、馬鹿らしくなったおれは「ええ」と生返事をして電話を切った。

名前と住所を聞くのを忘れたことに気づく。メモするべきだったろうか。でも、あの老人の奥さんであることに大方間違いないから申請書を見れば済む話だ。

（なにするんだっけ？）

次にするべき行動が脳の中で行方不明。

（掃除するんだったかな？……どこを？……わからない）。

腕を組んで頭を揺らしてもなにも浮かんでこない。

(帰るとするか……)

事務所を横切り、ドア脇にあるスイッチが目に入ったが電気を点けたまま帰ることにした。『経費削減のご協力』の実施要領で昼休み時間の消灯などを呼びかける偽善的な文書を挟んだクリップボードが回ってくるが、公務員じゃないおれには無関係だ。

裏口……職員専用ロッカー……それほど時間が経っていないのにどこか懐かしい。

そんな想いに耽る暇なく洞窟から助けを求めているのかと勘違いするくらい低くて気味の悪い声が休憩室から聞こえてきた。

男が血を流して倒れていた。畳の吸収力が追いつかず、赤い液体で溺れている感じがするくらい出血がひどい。血の臭いの生々しさに吐き気をもよおすがなんとか喉元で逆流させてこらえた。酸っぱい臭いが鼻から抜けた。

よく聞くと倒れている男は「誰か……」と呻いている。

「どうしたんだ？」

「さ、さ……刺された」

呼びかけると男は意外にしっかりした口調で伝えてきた。

「あんだ、誰？」

素朴な疑問にぶち当たりケガ人に対して素っ気無い口の聞き方をしてしまったが、無意識に出てしまった言葉を訂正するほどおれはお人好しじゃない。

「ここで働いて……いる」

(こんな奴いたかな?)

おれは男の顔を覗き込む。

(覚えがあるような無いような、もつとよく顔を見ないと……)
「どこを刺された？」

ケガの具合を診る真似をして肩に触れ、体を傾け、顔を見やすい向きに変えた。

「痛い！」

男は顔を背けた。

魂を抜かれた。『痛い！』と言った男の苦悶の表情が角膜に焼きついた。

記憶が粒子の粗い一枚の白黒写真となって戻った。男が一枚の用紙をおれに差し出す場面を撮らえた写真が……。

(この男は……そんな馬鹿な！)

声にならない絶叫が頭の中で響いた。脳ミソが溶けてしまったのか、器だけの頭に木霊のように響いて鈍痛となり眩暈するほどの疼きの連打が襲う。

確認する方法はある。

おれは事務所内に引き返して電話をかけた。覚えている番号はたったひとつ。親しい友人もいないし、親戚とも疎遠。自宅の番号だけが迷わずに自然とボタンが押せる。

「もしもし、T地域保健所ですが……」

「も、も、もしもし……あなた？」

電話の相手は慌てて受話器を取りにきたのか息切れしている。

「やっぱりおまえか……」

おれは独り言のように呟く。

「それはこっちのセリフ。さっきの電話あなたの声に似ていると思ったのよ。あなた保健所でなにをしているの？」

驚きと狼狽、そして怒りも入り混じった複雑な声で妻が尋ねてくる。

「は、働いているのさ、臨時職員として」

「なに言ってるの。保健所はとつくの昔に辞めてるじゃない！」
手から受話器が滑り落ちた。

受話口から妻の声がもれていたが、おれを呼び戻す力はない。
いつしか窓際に立っていた。

「老けたな」

周りが暗闇で鏡のように映った自分の顔を見て嘆く。

また写真が一枚追加された。おれが用紙に中野源一郎と書き込んで
いる写真だ。

突如としてボールペンを持っている右手が動く。写真が帯状のフィルムとなつて断続的な映像になった。目の前に座る男に促されて用紙に記入していくおれ。犬に激突され脳震盪（のうしんとう）を起こして倒れている男を茫然と眺めているおれ。我に返り自分より一回り大きい男を背負つて事務所内で一休みするおれ。男が起きて裏口に向かうのを後からつけたおれ。休憩室でなぜか冷蔵庫に触れた瞬間倒れた男のポケットから千枚通しが落ちたのでそれを拾うおれ。犬や猫の処分には2100円、だったら人間はいくらなのかと疑問を抱き、千枚通しで男を容赦なく刺したおれ。

罪悪感希薄で犬や猫を殺す手助けをしてきたおれに人間と他の動物との区別などつかなくなっていた。

しばらく正常に流れていた映像が逆回転をはじめて急停止した。静止画像には妻が拾ってきた犬をおれが散歩させている場面が映っている。

完璧に思い出しそうだ。

再び写真が映像となって動き出す。

長時間の散歩のあと、おれは段ボール箱を持ってきて犬を呼ぶ。

犬は白い息を吐きながら素直に段ボール箱に入る。エサがもらえると思ったのかそれとも新しい小屋をプレゼントされたと思ったのかわからないが馬鹿な犬だ。

ガムテープと荒縄を惜しげもなく使い、逃がさないという法則だけで大雑把に梱包する。仕上げに段ボール箱を背負い荒縄で体と一体化させた。

なにしてるの？

妻が寝間着姿のまま家から出てくる。

「おれは出稼ぎでいなくなるし、おまえは来週入院するんだからしかたないだろ。面倒を見てくれる親戚もいないんだぞ！」

そう言うと妻は目に涙を溜め、歯を食いしばって悲しみをこらえる。

前日から何度も繰り返されてきた議論に終止符を打つため、おれは妻に厳しい視線をぶつけた。

同情の余地はない。妻が港で拾ってきた犬は豚のような面構えで大きな声で吠えて近所に迷惑をかける。おれも妻も咬まれた。

なんでそんな犬を拾ってきたんだ。と訊くと妻は“あなたに似ているから”とケラケラ笑った。

家に犬がきてからあまり良い事がない。おれが勤めていた会社が多額の負債を抱えて倒産した。妻はこっちが聞いているだけで不快な気持ちにさせられる嫌な咳をして病院に通い、ついには入院するはめになった。

「可哀相よ。やめてよ！」

妻はとめようとするが、おれが威厳たつぷりに首を振って黙らせた。妻が追いかけてこないことを祈りながら雪道を歩く。

風が吹いていなかったのでもそれほど寒さを感じなかった。荷物を持って歩く運動量で上昇した体温が冬の冷たい空気によって首筋から流れ落ちる汗を気化して白い湯気で調整してくれた。帽子を脱ぐとまるで蒸気機関車だ。

保健所までは六キロの道のり。通りによって除雪をしていない歩道があるので長靴が雪で埋まり歩行が困難になる。道路に出ても車のスタッドレス・タイヤで磨耗した路面はツルツルで転んで体が宙に浮かないように摺り足で進むしかなく、雪のないときの倍の時間がかかった。

保健所に辿り着いた頃には太陽はすっかり沈み、グレーの空から雪が降りモノクロームの情景に染めていた。単純に遺影に似ているなと思った。疲れが蓄積されているからなのか暗いことを連想してしまうようだ。立ち止まると膝の痛みに気づき、ズボンを裾から捲って触ると熱を帯びていた。

(さすがに歳だな)

年々頭は固くなり妻と意見が衝突する頻度も増えてきた。この前など妻が買ってきたカレー・ルーが甘口じゃなく中辛だったことで揉めた。本当にくだらないことでケンカしてしまう。六十二歳にして生きている意味がわからなくなってきた。

妻にもう少しやさしくしたほうがいいのだろうか。犬の写真を一枚くらい撮っておくべきだったかな……いや、悲しい思い出がぶり

返してくるだけだ。そういえばまだ名前もつけていなかった。

段ボール箱の中で犬はおとなしくしている。作戦は成功だ。段ボールに入れる前に長時間の散歩をさせといてよかった。

クリスマス・イブでも保健所は忙しいのか一階と二階の角部屋に電気が点いている。

しかし建物に入ると中は閑散としていた。事務所には一人だけ職員がいた。若い男が受付にやってきた。対応が不慣れでおれは緊張をほぐしてやろうとわざと老け役で接しやすくしてやった。

気遣いは裏目に出た。蔑んだ目で見ながら申請書を取り上げて好き放題に記入していくので段ボール箱に入っている犬の凶暴性を誇張して作り話を聞かせて困らせてやった。

段ボール箱に閉じ込められていた犬はストレスがたまっていたようで若い男に突進した。休憩室で男を刺してから犬を探しに正面玄関にいくと闇から出現した犬に反応できず、若い男と同じ末路を辿った。

脳を支配していた映像が消え、おれの老け顔が窓に映る。

血のついた千枚通しが手からすり抜け、カランカランと転がる。

ずっと握っていたのに気づかなかったおれは間抜けを通り越して犯罪者となってしまった。

大変なことをしてしまった。

しかし、気持ちのどこかでいつかやるんじゃないかと思っていたことも事実。

「妻じゃなくてよかった」
はつきりとした独り言が口から発せられた。
本心だと信じたかった。

第四章 明るい病室

目覚めて真つ先に飛び込んできたのはまたしても白い天井だった。見た目はそれほどかわらないのに保健所の天井より清潔さを感じるのは消毒液のニオイがするからだろうか？腐るほど時間はあるから穴が開くくらい見ていられるが、天井を眺めているとまだ夢の中にいるんじゃないかと不安になる自分がいる。

体の軸を動かさずに右側に顔だけを向けた。

手を伸ばせば届きそうな距離に窓ガラスがある。びっしりと雪がこびりつき、白い幕で外の景色を遮って嫌がらせしている。

(まあ、どうせ外は雪景色だろうけど)

ポケットとじているだけでなにもすることがない。腕と足が10センチくらいしか動かせない。生活圏内はベッドの上だけと制限されてしまった。

床はチェス盤のような白と黒が互い違いに並べられた市松模様。起き上がって両足をつけ、組んだ両手を天井に向かって突き上げ、背骨が軋むまで伸びがしたい。そんなささやかな願いも叶わず、ベッドから一步踏み出た空間が別世界に感じる。

たまらず看護師さんに訊いたことがあった。

「いつ退院できますか？」

「安静にしていれば治りますよ」

笑顔で答えてくれる看護師さんの言葉が子供騙しのまじないにか聞こえなかった。

(どうしてこんなことになったんだ！)

寝たきりだとまともに脳が働かない。毎日平板化された生活による倦怠感と虚脱感、空虚な時間が流れるだけで脳が衰え、いままでの記憶が失われていく喪失感に怯え、世間から取り残されていく疎外感となにもできない無力感に襲われる。おれの人形化が加速していく。

せめて焦燥感くらいあれば生きていけるのだが……。早く治そうという焦りでもなければ生きていく意欲があるとはいえない。看護師さんに訊くまで心の中にあつた僅かな焦りがいまでは完全に失っている。

脳をちよつと使っただけでひどく疲れた。
目をつぶって眠ろうとしたとき、病室出入口の白いカーテンが揺れた。

誰かが入ってきたらしい。
きつい香水の匂いがして予想はついた。

挨拶代わりに母親はいつも同じ台詞を言う。
「具合はどう？」
おれは頷くことしかできない。そんな自分を腹立だしいと思わない自分に嫌気がさす。

母親は粗末なパイプ椅子に座り、買物袋からリンゴを取り出した。
そして果物ナイフで皮をむきながら静かに語り始めた。

「昔々あるところに悪戯好きで好奇心旺盛な王子様がいました」
（おいおい、やめてくれよ）

一人部屋でよかつたと心底思った。

「王子様は役人たちの仕事ぶりをチェックするためにお忍びで城下町のお役所に勤めることにしました。それは犬や猫の遺体を片付け

るとても辛い仕事でした。クリスマス・イブの夜、王子様がたつた一人で残業をしていると老人が犬を連れて処分してほしいとやってきました。ところが王子様は犬を逃がしてしまいました。怒った老人は持っていた千枚通しで王子様を刺しました」

おれに起こった出来事をわかりやすく、幼い子供に絵本を読み聞かせる感覚で話してくれるのは刺激を与えたくないという配慮かもしれないが事実と少し違う。

まず、おれは王子様ではなく郵便局員の小倅。千枚通しを持っていたのはおれ。なんのためにおれはそんなものを……使い方によって他人の命を奪い、己を破滅させる柄のついた大きな針は人生を変える大きな力がある。きつとポケットに入れておくことで安っぽい優越感に浸っていたのだろう。

もう、子供じみたことはしない。

生まれたばかりの赤ちゃんが病院から人生をスタートさせるようにおれも病院から生まれ変わるチャンスをもらったと思いたい。

「次の日、その老人はあっさり警察に捕まって事件のことを自白しました。なぜか狂犬病予防業務日誌に老人の名前と王子様を処分した記述が残されていたとのこと。なんでもその老人は昔臨時職員として保健所に勤めていたらしいの。保健所を見回る警備員さんは二階の会議室でヘッドホンをつけてテレビを見ていたので階下の騒ぎにはまったく気づかず、定期的に巡回していないことが発覚して責任を取らされる見込み」

おれが老人に刺された理由がわからない。母親が言ったとおり犬が逃げたことへの腹癒せで刺したのか？よくわからない。それにしてもあの警備員の竹山さんにサボリ癖があったなんて……過去の経

歴や見かけで人を判断してはいけない良い教訓になった。

不思議と二人に憎悪を抱かない。彼らは肩身の狭い思いをしていることだろうし、いまのおれには復讐する体力も度胸も知恵もない。

「刺されたとき、王子様は這つてあるところへ向かいました。冷蔵庫のドアを開け、頭を突っ込んだままうわ言のように“ごめんなさい”を繰り返して過去のたわいない悪戯を反省していました」

皮むきが終わり、食べやすくスライスしたリンゴを母親が皿に載せた。

「まだ気にしてたの？」

母親の気楽な尋ね方におれは全身の力が抜けた。

「ぞおだあよお（そうだよ）」

久々に声を出したので掠れてうまく発音できなかった。恥をさらしてでも返事をかえしたかった。

そのとき、雲が風で流されて太陽が顔を覗かせた。同心円の配列となった光の輪が窓をさして母親の顔を逆光で隠す。

陽の暖かみを吸収した影響なのか窓についでいた雪がずり落ちた。まだまだ春は遠いのに家族との雪解けが早まりそうな気がした。

狂犬病予防業務日誌

エピソード

もう、コリゴリだ。

小さな箱に閉じ込められるわ、食事は口に合わないわ、散々だ。こんな短期間で故郷に帰りたくなるとは自分でも信じられない。

ミンナを探そう。

決心してからの行動は早く、鼻で潮風をキャッチすると全速力で港に向かった。

自分の縄張りだった港を闊歩していると、海の底へおもりを沈めている鉄の塊のひとつに目が離せなくなった。

そこにミンナがいた。

リレー方式で箱を陸に揚げていた。蓋がずれているところから歩脚の先がハサミになっている生き物が見えた。

(いい匂いはするけれど、人間はあんなグロテスクな生き物を喰うのか?)

鉄の塊を撫でるように舞う風に誘われて鼻がピクピク動き、男たちの汗臭さ、塊の内部から懐かしい香りがして故郷を無性に恋しくさせた。

耳をピンと立てる。もっと確実な情報がほしかった。ほどなく話し声を受信して男たちが呼び合う名前を聞き取ると思わずニヤけてしまう。

イズマイロフ、ケルジャコフ、スメルチン……ミンナに間違いないかった。

四つの脚を折り曲げて雪の上で体を丸めた。興奮を抑えるのに雪の冷たさがちょうどよかったのは僅かな時間で、海から吹いてくる風が壊郷の念よりも体の温かみを奪い、寒さだけを意識させる。

尻尾をマフラー代わりにしていたら毛が鼻の穴に入りくしゃみが出た。仕事にひと区切りついた一人の男がこつちに気づく。脈ありだと根拠の無い自信がわく。

待機していた陸を走る鉄の塊に箱が整然と隙間なく並べられるとミンナとは対照的な顔立ちをした背の低い男が身振り手振りで値切り交渉を開始した。

背の低い男が指を三本立てケースに入った飲み物を差し出すとミンナの代表者が渋りながらも握手に応じた。どうやら言葉の壁を乗り越えて交渉が成立したらしい。

陸を走る鉄の塊に乗って背の低い男が引き上げると、海に浮かぶ鉄の塊でささやかな宴がはじまり、アルコールの匂いがする液体を浴びるように飲むではしゃぎ過ぎた男が代表者に注意されることがあっても、周りの男たちは指をさして笑い場が白けることはない。

鉄の塊に歩み寄った。

「見るよ、汚ったねえ犬がやってくるぜ」

一人の男が嘲るように笑うと他のミンナもつられて鼻で笑った。

「なに言ってるんだ。かわいいじゃないか」

擁護してくれたのはクシャミしたとき目が合った男。

「ワン！」

ひと声吠えるとその男が鉄の塊から降りてきた。

「おい、毛が抜けてるぞ」

「きつと皮膚病だぜ、触らないほうがいい」

「気にすることないぞ」

ミンナの忠告を無視してその男は話しかけてきてくれた。

「狂犬病じゃないのか？」

「馬鹿野郎。日本には一九五七年以降、狂犬病の発生は認められていないんだぜ」

両手で掴まれたまま顔を左右に揺さぶられ、手荒なスキンシップを受けているうちに男が首のアクセサリーに気づき、興味を示した。

「おい、首輪にカラシニコフって彫ってあるぞ！」

その一言でミンナが集まる。

「なんだって？」

「本当だ。ロシア語だ」

「どれどれ」

「地球上に一億丁存在する我が母国から生まれた銃の名前をつけるなんてセンスあるな」

「世界で最も人を殺している銃だ」

「女、子供でも簡単に扱えるからな」

「中東で子供がカラシニコフをぶっぱなしている映像をニュースで見ただぜ」

自分の名前と意味をはじめて知った。

「気に入った、おまえを連れていくぞ」

抱きかかえられ鉄の塊に乗ることに成功した。新しい飼育者を得た喜びに心が躍った。

数時間後に鉄の塊は海上を走りはじめた。

気分が悪い。動き出したばかりだから乗り物酔いじゃない。

涎がとめどなく口から流れ落ちる。強烈な眠気も襲ってきた。そのまま眠ってしまうと二度と目を覚ませない気がして体が震えた。エンジンオイルの臭いが圧縮された空気の塊となって鼻を再起不能にさせる。内部が鉄製の扉に閉ざされているために外に出て新鮮な空気を吸うことも許されない。

ミンナの作業服、長靴、机、椅子、目に入るものすべてが敵に見える。咬みついて振り回し、爪を立てて隔壁を削っても気分が晴れない。

敵……敵……敵……敵……。

どこを見ても敵だらけ。

思い切り吠えて虚勢を張った。

何回も何回も吠えた。

異常を察したのか奥から早いリズムで足音が聞こえてきた。物陰に隠れた。

相手は背中を向け無防備。

咬みつくチャンス！

後肢に体重をかけていつでも跳びかかれる体勢をとった。

了

狂犬病予防業務日誌

エピソード（後書き）

エピソードにて「狂犬病予防業務日誌」は完結しました。全部読むと一時間程度かかりますが、お付き合いしてくださった方がとうとうございます。ホラー（連載）で「無期限の標的」とホラー（短編）で「水たまり」「娘、お盆に帰る」「人類、最後の言葉」「彼女の好きなモノ」など多数投稿しています。また恋愛（短編）でも「木漏れ日から見詰めて」という作品が投稿済なので読んでくれた方は感想をよろしく願います。必ずコメントを返信します。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3910c/>

狂犬病予防業務日誌

2008年8月29日18時12分発行